

【特別寄稿】

日本語教師に「魅力を感じる」から「なりたい」、 そして「なる」へ

—大学の養成課程におけるキャリア形成支援—

From Attraction to Aspiration to Actualization: Supporting Career Development of
Future Japanese Language Teachers in University Programs

澤邊 裕子 東北大学

SAWABE, Yuko Tohoku University

キーワード：キャリア形成支援、パーソナルビジョン、日本語教師養成課程

1. はじめに

筆者は2007年から2023年までの16年間、宮城県仙台市にある宮城学院女子大学において日本語教師養成課程（2006年度開設）を担当してきた。同大学は地方の女子大学であり、留学生が極めて少ないという環境下で、いかにして学生を日本語教育という世界へと連れ出し、日本語教師という職業を軸としたキャリア形成への動機づけを行うか、取り組みを続けてきた。卒業生の進路は一般企業、公務員、国語教員など多様であるが、日本語教師養成課程の受講生一学年12名程度のうち、日本語教師を選択する卒業生は毎年1～5名おり、その多くが仙台市内の日本語学校に専任教員として勤務し、この地域に根差して活躍している。筆者は現在、留学生を対象とする日本語教育の現場に戻り、養成課程で学生たちと共有しようとしてきた日本語教育の世界の面白さや意義を、改めて実感する立場にある。卒業生たちと同業者として語らう機会も増え、新たな学びと喜びを得ている。

本稿では、筆者が日本語教師養成課程を運営するうえで大切にしてきた3つのキーワード、「パーソナルビジョンの構築」、「あこがれのベクトル」、「長期的キャリア構築の支援」をもとに、「経験からの学び」を軸とした教育実践について報告する。なお、2025年夏に実施した卒業生4名へのインタビューの内容も適宜引用し、卒業生がこれらの経験をどのように振り返っているかについても紹介する。

2. パーソナルビジョンの構築

キャリア形成支援において最も大切にしてきたのは、「日本語教師になること」そのものをゴールに据えるのではなく、学生一人ひとりが「どのように社会と関わり、どのように生きていくか」というパーソナルビジョン（理想の自己像）を持つプロセスを支援することである。大学内には留学生がほとんどおらず、日本語学習者との接点が極めて希薄であった。そこで筆者は、正課外の活動も含め、学生が外の世界と接し、多様な価値観に触れる機会を創出することに力を入れた。例えば、課外研修として、南山大学の留学生別科との協働プロジェクト（澤邊・安井, 2011）、海外の日本語学習者との交流学习（澤邊・岩井, 2021）、ボランティア活動として外国につながるのある小中高生へのサ

ポート活動、「やさしい日本語で読む日本文学」シリーズの冊子（デジタルブックを含む）の制作（澤邊ほか, 2022）などである。

こうしたプロジェクトを通し、学生たちが多様な学習者と価値観に触れ、学びほぐしを促し、視野を広げていくことを目指した。ある卒業生は、大学時代の学びを通じた変容について次のように振り返っている。「大学で日本語教育に触れて、自分の価値観が変わりました。外国について家族と話していると、入学前の自分の考え方を思い出し、『本当に自分の価値観が変わって視野が広がったんだな』と感じます」（2022年卒業生）。こうした経験を通して学生が身につけるのは、日本語教師としての専門知識に限らず、一人の市民として多様な他者と共に生きる力である。それは職業選択に関わらず、すべての学生にとって意味のある学びであると考えている。

3. あこがれのベクトル

斎藤（2001）は「学ぶことは他者のあこがれにあこがれること」であり、「あこがれにあこがれる関係」こそが教育の根本原理であると述べている。斎藤は、このあこがれを「新しい世界へ向かうベクトル」として表現している。

ベクトルの大きさは、その力の強さを表す。つまり、強いあこがれを持つ「先行者（媒介者）」という大きなベクトルに触れることができれば、自分の中にもあこがれのベクトルが生まれるということである。斎藤によれば、学ぶという出来事が生じるためには、その世界の魅力を体現する先行者の存在が不可欠であり、学習者が先行者のベクトルに触れるための媒介となるのが「教師」という存在である。

筆者自身、高校時代に日本語教師による著作に触れ関心を持ち、大学で恩師に出会い、日本語教育に魅了された一人である。大学の教室において、教師が日本語教育を「学問的知識」として淡々と語るのか、あるいは「自らがのめり込んでいる面白い世界」として熱意を持って語るのかによって、学生の中に生じるベクトルの強さは大きく変わってくる。まずは教師自身が「これが好きだ、面白い、社会的な意義を感じてこの世界に関わっている」という姿勢を見せることが、学生たちの関心を生み出すことにつながるのではないかと考えている。

しかし、教師一人のベクトルだけでは限界がある面もある。日本語教育現場を持ち続けている場合はそれも可能かもしれないが、養成課程の授業のみを担当していると、徐々に現場感覚が薄れていってしまうからである。筆者の場合、そうした限界点において重要な役割を果たしてくれたのが、初期の卒業生たちであった。学内イベントなどで、国内外の様々な現場でキャリアを歩み始めている卒業生を積極的に養成課程に招き、在学生とのセミナーを開催したが、彼らは後輩たちに新鮮な体験談や自身のキャリアの歩み方を語ってくれる存在、「あこがれのベクトル」になってくれた。

2022年には、卒業生14名の協力を得て、在学生が先輩にインタビューした記事集を作成した。これは、「日本語教育演習II」という演習授業を履修している学生たちが、日本語教師養成課程を修了した先輩にインタビューし、その内容をまとめたものである。大学時代の過ごし方や今後のキャリアについて、学生自身が先輩からじっくりと話を聞く機会を設けることを意図したプロジェクトであった。このように、年齢の近い先輩が

語る「やりがい」と「苦勞」の両面を含んだ体験談は、在学生にとっての「あこがれ」をより具現化し、日本語教師といっても多様な歩み方、キャリア形成の在り方があるということへの気づきをもたらす役割を果たしていたと考えている。

2025年に筆者が実施したインタビューでは、卒業生たちが在学時に聞いた先輩の話をどのように受け止めていたかを尋ねた。ある卒業生は「いろんなキャリアがあって、日本語教師って言っても、一回働いて大学院に行かれた先輩とか、海外で活躍されて日本に戻ってくる先輩とか、日本語教師にはいろんなキャリアがあるんだなっていうのをすごく覚えています」（2019年卒業生）と話し、また別の卒業生は、「皆さんすごい体力と決断力があるなって。大学院に行って休学して海外に行った先輩もたくさんいて、すごいなって思いました」（2023年卒業生）と、先輩たちの多様で積極的なキャリア選択に刺激を受けたことを語っている。

4. 長期的視点でのキャリア構築支援

3つ目は、卒業後も見据えた長期的視点での支援である。卒業生に対して日本語教育に関する情報提供を行い、求人紹介やキャリア相談に応じ、時には一緒に日本語学校の見学に行くといった伴走を続けてきた。大学卒業後、一度民間企業に就職した後に、数年を経て日本語学校へ転職する卒業生や、研究テーマを見つけて大学院に入ってくるというケースも少なくなかった。大学時代に培った「日本語教師という選択肢」や「パーソナルビジョン」の種が、社会人経験を経て芽を出し始めることもあるのだと考えている。一般企業で1年間勤務した後に日本語学校へ転職したある卒業生は、「最初は制作会社に入ってCMを作るようなところだったんですが、誰かの補佐の仕事より、自分が主体になってやるような仕事がしたくて、そう考えたら、私って日本語教師できるなと思って転職しました。実習先の先生に『あなたには日本語教師っていう選択肢もあることを頭の片隅に入れておいてね』と言われた言葉と、4年間の蓄積が日本語教師への転職の際に、背中を押してくれました。（2023年卒業生）」と語っている。このような語りからは、学生の4年間のあらゆる経験が新たな一步を踏み出す力になり得ることがうかがえる。

日本語教師としてのキャリアを積みながら、文部科学省委託の中堅研修や講師育成コース、各種研究会や学会に参加し、積極的に専門性を高め続けている卒業生の姿からは、次世代へとつながる日本語教師養成の循環が形成されつつあると感じている。

5. おわりに

筆者は現在、留学生への日本語教育の現場に戻り、これまでの養成課程での実践を改めて振り返る機会を得ている。今、改めて感じるのは、実習やプロジェクト、先輩との対話といった「経験からの学び」は、すぐには形にならないことも多いが、時間をかけて学生の内側で熟成し、社会に出た後に意思決定の力となって現れるということである。振り返れば、養成課程での16年間は、筆者自身にとっても一つの長い経験的な学びの時間であったと言える。本稿で述べてきた実践は、一地方の一教師による小規模な養成課程における試みにすぎないが、筆者にとっては、学生や卒業生たちとの関わりの中で

育くんできた確かな財産でもある。国家資格制度という新たな枠組みの中でも、この「人間的な関わり」に基づくキャリア形成支援のコアになる部分は変わらないと考えている。今後も、学生や卒業生、教師教育者仲間の皆様とともに学び合いながら、日本語教育を学ぶことの意味とキャリア形成支援の在り方について考え続けていきたい。

参考文献

- (1) 齋藤孝 (2001) 『子どもに伝えたい<三つの力> 生きる力を鍛える』 NHK 出版
- (2) 澤邊裕子, 岩井朝乃 (2021) 「海外の日本語学習者の個別性を考慮した授業デザインの試み : 『外国語学習のめやす』と交流学習を取り入れた日本語教員養成課程の実践から」『宮城学院女子大学大学院人文学会誌』 22, 11-25.
- (3) 澤邊裕子, 高橋なつ, 熊谷未来, 中野沙耶, 安倍菜々香, 鈴木茅優 (2022) 「『やさしい日本語で読む日本文学』リライト・プロジェクトの報告 : 学生間の協働と主体的なことばの選択から得られたもの」『日本文学ノート』 79, 1-17.
- (4) 澤邊裕子, 安井朱美 (2011) 「外国人留学生と日本人学生間における協働プロジェクトワーク—4年間の実践を踏まえての今後の課題」『日本文学ノート』 46, 12-32.